

動詞連用形転成名詞を後部成素とする 複合語の連濁

鈴木 豊*

[キーワード] 非連濁規則 複合名詞 目的格 連用修飾格 熟合度

[要旨] 動詞連用形から転成した名詞（以下これを「連用名詞」と称する）を後部成素とする複合語に関して、「目的格（ヲ格）の場合は非連濁形をとる」という規則（条件・制約）が連濁に関する先行研究の中で指摘されている（以下この規則を「ヲ格非連濁規則」と称する）。そしてそのことは「熟合度」に関係すると説明されている。本稿ではこれまで十分な理由づけがなされてこなかったこの非連濁規則の例外について、「熟合度」が連濁／非連濁の決定にどのように関わっているのかを、複合語の語構造と後部成素としての連用名詞の用法を詳しく検討することを通じ、以下のような新たな条件を設定することでより合理的な説明が可能となることを示した。(1) ヲ格非連濁規則の例外と見なされてきた「人相書^がき」・「石積^つみ」・「板敷^きき」・「タイル張^りり」・「梅干^しし」・「縄張^りり」等はその意味が「～ヲ～シテアルコト」であり結果の持続のアスペクトを表したり、あるいは結果の持続の意味がさらに特定の事物に転じている場合であり、通常のヲ格連用名詞が「～スルコト／モノ／ヒト」の意味をもち非連濁形を取ることと対照的である。(2) 「甲羅干^しし」「命拾^ひい」等は「甲羅を干すこと」「命を拾うこと」ではなく、比喩的な意味であり連用修飾格に近い用法である。(3) 「兎狩^りり」「雑巾掛^けけ」など意味の分化を清濁に対応させることによって連濁したものがあつた。ヲ格連用名詞としての用法「石積^つみに行く」は動詞連用形の用法「石を積^つみに行く」との間に「積^つむ」という動作性を中心とした意味の近似性があるが、(1) (2) の用法との間にはそれがない。通常のヲ格連用名詞は類推の力が非連濁の制約として働き、(1) (2) の用法（「動作性」から「状態性」に転じた意味をもつ）では類推の力が働かないために連濁したのである。

1. はじめに

日本語の連濁現象は種々の条件によって連濁／非連濁が決定されると考えられる。その中には「ライマンの法則」のように例外がほとんどない規則（「法則」・「条件」・「制約」・

*教授／日本語学

「傾向」を「規則」で代表させる)もあるが、非連濁規則には例外になることの理由が十分に説明することができない例が存在する。本稿では現代日本語の動詞連用形転成名詞(以下これを「連用名詞」と称する)を後部成素とする語の連濁/非連濁の条件について考察する。よって、考察の対象は和語の連用名詞の形態論的連濁現象についてであり、漢語や外来語を語幹にもつサ変動詞は対象から除外される。また、複合動詞「飛び跳ねる」が名詞「飛び跳ね」に転成したような場合も連用名詞に含めない。

連用名詞の連濁に関して、特に前部成素と後部成素が連用修飾関係にあるときは連濁傾向が強いのに対して目的格(ヲ格)の関係にあるとき非連濁傾向が強いこと(本稿ではこれを「ヲ格非連濁規則」と称する)が早く奥村三雄(1955)によって指摘されており、金田一春彦(1976)は具体例を多数あげてその規則性についての詳しい検討を行っている。その結果ヲ格の場合にも多くの例外があることもまたよく知られている。連用名詞の場合に限らず連濁/非連濁規則には例外が多く存することからその規則性に疑問がもたれたり、遠い過去に連濁が規則的であった時代を想定したり、またさらなる規則性が追求されてきたりした。現代語の連濁現象が複雑であることは事実であるが、その複雑さは規則性がないことに帰されるべきではなく、未知の規則性の追求や過去の規則性(の痕跡)の発見などに努めるべきである。連用名詞に関する連濁研究も連濁現象全体の複雑さの理由を解明する端緒になるものとする。

本稿では先行研究の成果を整理したのち、まず連濁可能な(ライマンの法則等に抵触しない)連用名詞について「ヲ格」の場合に非連濁傾向が強いこと(すなわちそれ以外の用法に連濁傾向が強いこと)を確認し、その後連用名詞を後部成素とする複合語の具体例に基づき、主としてヲ格非連濁規則の例外の検討を通じ、例外となる理由を合理的に説明できる規則を帰納する。考察対象の資料に用いる連用名詞およびその複合語は先行研究であげられた例に加えて今回あらたに辞書(具体的には電子辞書所収の『広辞苑 第5版』『大辞林 第2版』『大辞泉』『日本国語大辞典 第2版』)等から収集した例と辞書の項目に立たない臨時的な語(複合によって特別な意味を生じていない「布団干し」「ゴミ拾い」等の語)である。なお先行研究でヲ格とともに非連濁傾向が強いとされている主格(ガ格)については別の機会に考えたい。

2. 先行研究

これまでの連濁研究では連用名詞を後部成素とする複合語の連濁現象を専門に扱ったものはなく、連濁研究論文の一部で言及されているのみである。このような状況をふまえ、以下に先行研究で指摘されたことを可能な限り丁寧に確認したうえでそれらの整理を行う。

Benjamin Smith Lyman (1894) はヘボン『和英語林集成』第二版を資料として連濁/非連濁に関わるすべての語を対象とした研究であるが、その中でライマンは「規則化できない例外的な非連濁の例」の「(a) 動詞の活用語尾をもつもの 353 例(連濁例は 681 例)」として非連濁例のすべてを示している。ヲ格に非連濁形が多いことの指摘はなされていないが挙例の多くはヲ

格と見なせるものである（Benjamin Smith Lyman（1894）の全訳と解説を含む屋名池誠（1991）を参照した）。

連用名詞を後部成素にもつ複合語の連濁に関し、ヲ格に非連濁形が多いことを指摘してその理由について考察した研究には以下のものがある。

奥村三雄（1955）は連濁の傾向性を（1）～（5）（口）に分類した。そのうちの（3）（イ）が連用名詞に関するもので「前部が後部の目的格の時は、副詞修飾格の時より連濁しがたい。風呂タキ cf. 水ダキ。」とある。『国語学辞典』の「連濁」の項目中の簡潔な記述であるが「ヲ格非連濁規則」を明文化し、「連濁しがたい」という表現で例外が多く存することを示したことは大きな意味をもつ。

中川芳雄（1966）は連用名詞を後部成素にもつ複合語が人の意味である場合を「語彙分化の問題」として捉え、以下のように説明している。

〈人〉も〈犬〉もともに名詞である。この名詞に「を格」で〈ころし〉が接合すると、一方は〈人ごろし〉と連濁し、他方は〈犬ころし〉とになる。〈人ごろし〉は、殺人行為、殺人犯をさし、〈犬ころし〉は犬をとり殺すことを職とするもの、それを業としている人、または、それを職とする立場においての犬を殺す行為をさす。これを逆に〈人ころし〉・〈犬ごろし〉といっは変でおちつかないというのは、すでに連清において、同一語の意味分化が、その分野をわかって語彙定着しつつあることを示している。人形つかい・猿つかい・てずまつかい等も、それを職都し業（わざ）としている人を意味する。これに対し、包丁つかい、筆づかいという連濁形は、包丁の操作、筆のこなしを意味してはいるけれども、「職とする人」の表現には用いない。（中略）

ここに連清・連濁の意味分有の機能を見なければならぬとともに、意味分有機能が、「職とする人」をあらわす時は、連清形というような単純な構造ではないこと、またほかの条件変化の様相によって、連清連濁のあり方が、複雑さを示していること、しかし、それらが、無秩序な雑居ではなくて、整序可能な対象であること、等は注意していかなければならない。

連用名詞を後部成素に持つ複合語が人の意味で用いられるとき非連濁か傾向がいつそう強いことは[4.3]でも検討する。

金田一春彦（1976）はそれまでの連濁研究を紹介・批評しつつ具体例に基づき自説を展開したものであるが、連用名詞については奥村三雄（1955）を受け、多数の具体例からヲ格非連濁規則の例外をあげ、その例外たる理由について考察している。金田一氏の研究はその後の研究に引用されることも多く後の研究に与えた影響が大きいことと、考察の対象となった語例を示すことも重要であると考え、連用名詞に関係する部分を要約せずに引用する。

ところで奥村三雄は、前出「字音の連濁について」を発表したほかに、国語学会編『国語学辞典』の「連濁」の項を執筆し、ここに従来の説をまとめて紹介している。ロドリゲスや石原、ライマンの考えも一往ここに紹介されているが、ここでもう一つ彼は名詞+動詞の連用形という形の複合語を取り上げてこう述べている。

(一) 名詞がその連用形の目的格の場合には連濁が起りにくい。

(二) 名詞がその連用形の副詞的修飾格の場合には連濁が起りやすい。

このような傾向はたしかにあると思う。これは、副詞的修飾語と動詞の関係は、主格または目的格と動詞との関係に比べてより緊密である。そのために連濁が起りやすいのだと考えられる。アクセントの面でも副詞的修飾語+動詞の場合は全体が〇〇〇〇型、〇〇〇〇〇型というような平らに助詞まで続く型のもが多く、主格名詞または目的格名詞+動詞の場合には〇〇〇〇型、〇〇〇〇〇型というような前の方に高い部分がある型のもが多いことが知られているが、関係のあることにちがいない。

(中略。表の引用も省略する)

ところでこの場合には上にあげた語例で知られるようになんかの例外が見出されるが、特に例外の生じるものに二つのジャンルのものがあることは注意を要する。

一つは、動詞の連用形の第二拍がナ行音、マ行音のものおよびエのもので、それらは主格・目的格+動詞の場合でも比較的連濁するものがあることである。例えば、前例の中で「人死ニ」「瀬踏ミ」「足踏ミ」「値踏ミ」「目覚メ」「帯締メ」などの「□死ニ」「□踏ミ」「□覚メ」「□締メ」の形で、「井戸替エ」などの「□替エ」の形がこれであるが、ほかにヨーズミ(用済み)、ツマゴメ(妻籠)、クソダメ(糞だめ)などもそれである。また、「□好キ」の形に連濁が多いのは、古く「何々を好く」ではなくて「何々に好く」と言った名残であろうか。また、次のようなものは「を」が経過や分離を表わすために目的格ではないからであろうか。

——越エの形 山越エ、伊賀越エ、箱根越エ、川越エ

——越シの形 川越シ、三年越シ

——立チの形 巢立チ、鹿島立チ

ただし「□引き」の形に連濁が多い理由はわからない。

また、もう一つ動詞の部分が三拍になると、比較的連濁が多くなると見られる。例えば、上には出さなかったが、

人通り、店仕舞イ、女嫌イ、浄瑠璃語り、代替り、人殺シ、秀オゾロイ、山開キ、鏡開キ、乳離レ、人頼ミ、人助け、息ヅカイ、神ガクシ、気ヅマリ、金ヅマリ、フンヅマリ、医者ダオシ、酒ヅクリ、菊ヅクリ、金払イ、咳バライ、金包ミ、日ダマリ、気ヅカイ、仮名遣イ、人使イ、湯ザマシ、爛ザマシ、目覚まし、アナタゴノミ、主人ゴノミ、身グルミ、親方ジコミ

などがそれである。

人形使イ、魔法ツカイ、毬ホーリ、露ハライ、チリハライ、棒タオシ、目カクシ、首クク

り、下駄カクシ

のような例もないではないが連濁を起こす方が多いことは事実である。佐藤栄作首相のころ、「人作り」がヒトツクリかヒトヅクリかが話題になったが、あれもこの間をゆれている語であるためだった。あとが三拍語のものに連濁が多く見られるのは、全体を一語にまとめた形にしようという努力の現れかと考える。

このように金田一春彦（1976）により連用名詞に関わる規則の例外が明示され、かつその理由についても考察が行われた。また連濁とアクセントが並行した現象であることも具体的に説明された。

奥村三雄（1980）は奥村三雄（1955）に語例を増補したもの。連濁の傾向性を（1）～（3.2）に分類したうちの（2.2）（a）が連用名詞に関する部分で「前部が後部の目的格の時は、副詞修飾格の時より連濁しがたい。例えば、絵書き一筆書き、飯炊き一水炊き、屋根葺き一藁葺きなど」とある。

奥村三雄（1984）は前記奥村三雄（1955）（1980）大幅に改訂・増補したものとなっている。また金田一春彦（1976）の説に対する言及もある。以下に連用名詞に関わる部分を引用する。なお用例に続けて〔 〕内に京都アクセント・東京アクセントが付されているが、そのアクセント表示方法は京都アクセントについては式（コ＝高起式、テ＝低起式）と核の位置を、東京アクセントは核の位置（前から数えた拍の位置）のみを数字で示すという表示法である。

〔1.2〕もともと複（熟）合度は主観的な意識にかかわるだけに難しいが、そういう意味では、左記（a）（b）の如く、複合度が余り強くなさそうなものに関し、全体を一語的な形に見せる為、敢えて連濁形をとる場合もある。

（a）左記（i）（ii）の如き複合語形（目的格や主格の名詞＋動詞の連用名詞形）において、（i）の類（後部成素が三拍語）より連濁し易いようだが、複合度の面からして（i）の類が（ii）の類より緊密だとは見なし難い。（i）の場合は、全体を一語形として示す為、連濁形を取る必要があったと考えられる。

（i）後部が三拍語の場合＝女^{おんなざらい}嫌・人^{ひと}殺・酒^{さけ}造・人^{ひと}助・代^{だい}替・美人^{びじんぞらい}揃・人^{ひと}通^{どおり}…

（ii）後部が二拍語の場合＝人^{ひと}買・絵^え描・金^{かね}貸・草^{くさ}刈・指^{ゆび}切・目^め利・虫^{むし}食…

（b）また「一^{ひと}葉・一^{ひと}書・一^{ひと}揃・一^{ひと}重^{かさね}…」^{ひと}「一^{ひと}つ葉・一^{ひと}つ書・三^{みつ}つ揃・三^{みつ}つ重^{かさね}」など、^{ひと}「一^{ひと}つ～・三^{みつ}つ～…」の形は「一^{ひと}～・三^{みつ}～…」の形に比べて連濁し易いようだが、これについても、ほぼ同様の事が言えよう。即ち「一^{ひと}つ・三^{みつ}つ…」の類は独立語形だが、「一^{ひと}・三^{みつ}…」の類は語としての独立性に乏しい」というような事情もあり、「一^{ひと}つ葉…」の類が「一葉（ヒトハ）」の類よりも緊密な複合語だとは見なし難いのである。

なお、右記（a）や（b）の現象については、『上智大学言語学科紀要』金田一氏論文で

もふれられる所があるが、その解釈は本稿と異なる。

[4]「藁葺き／屋根葺き・雨降り」など、「名詞＋動詞の連用名詞」という複合形において、前部が後部の目的格や主格のものは、左記(i)～(iii)の如く、連用修飾格のものに比べて連濁し難いが、これもやはり複合度に関係する。アクセント面を見ても、次の如く、概ね「目的格・主格＝有核型(非連濁)、連用修飾格＝無核型(連濁)」というような対立が認められるのである。

(i) 目的格一画書き〔コ1・1〕、金貸し〔コ3・3or4〕、草刈り〔同〕、爪切り〔同〕、水差し〔同〕、物差し〔同〕、札差し〔コ3・3or4or0〕、飯炊き〔同〕、風呂炊き〔同〕、米搗き〔コ3・2or4or0〕、首切り〔テ3・3or4〕、腹切り〔同〕、指切り〔同〕、状差し〔同〕、女郎買い〔テ4・2〕、将棋指し〔テ4・3〕…

(ii) 主格一目利き〔コ1・3〕、腕利き〔テ3or4・4or0〕、虫食い〔テ3・3or0〕、雨降り〔テ3orコ0・2〕…

(iii) 連用修飾格一小買い〔コ0・0〕、上書き〔同〕、横書き〔同〕、先貸し〔同〕、角刈り〔同〕、下刈り〔同〕、丸刈り〔同〕、五分刈り〔同〕、辻斬り〔同〕、四切り〔同〕、二度咲き〔同〕、八重咲き〔同〕、ミヅ炊き〔同〕、仲買い〔コ0・0or2〕、裏切り〔コ0・0or4〕、芋刺し〔同〕、仮名書き〔テ0・0〕、縦書き〔同〕、貸貸し〔同〕、前貸し〔同〕、又貸し〔同〕、又聞き〔同〕、下敷き〔同〕、中敷き〔同〕、藁葺き〔同〕、千切り〔テ0・0〕、犬死に〔同〕

従って、『「名詞＋連用名詞」の形は連濁しない』というライマン説は、右記(i)や(ii)の類にのみ適用されるわけである。

もともと日本語では、『目的格(時には主格も)と連用修飾格との区別は困難』とする説が有力だが、しかし実際問題として、右記連濁現象やアクセント型などの面にその区別が認められる事は、見逃せない所だろう。

[4.1] 金田一春彦氏説の如く、「越え(川～・山～・伊賀～・箱根～)、越し(川～・三月から・五年～)、立ち(巣～・鹿島から)、好き(酒～・一～・物～・世話～・男～・女～)」など、連濁形の中にも「を」格の例が或程度存するが、それらの「を」はいわゆる目的格と異質の場合がめだつ。例えば「山を越える・川を越す・巣を立つ」等の「を」は、出発地点や経過地点の類を示すものであり、外国語との対応関係等からしても、目的格とは見なし難い。また「好く」に関し、「道を好く」(古今連談集)の形の他、「連歌に好く」(虎明本狂言)「茶の湯に好く」(日葡辞書)の如き形がかなり優勢である事も、周知の所だろう。

[4] (iii) の「『「名詞＋連用名詞」の形は連濁しない』というライマン説」という表現は不正確であり、ライマンは「規則化できない例外的な非連濁の例」として連用名詞をあげているの

である。

佐藤大和（1989）は連濁／非連濁規則を広く網羅しており、連用名詞についても特にその用法を意味の上から詳しく分類している。連用名詞に関わる規則は16項目立てられた規則のうちV15・V16である。

(V-15) (名詞+動詞連用形)において、副詞的連用修飾関係では連濁を起し易く、格関係では連濁を起しにくい。

(目的格) 草刈り、芝刈り、稲刈り

(連用修飾) 角刈り、丸刈り、五分刈り

(主格) 雨降り、霜降り、雪降り

(連用修飾) 本降り、土砂降り

連用修飾関係は、格関係よりも緊密性が強いいため、このような傾向がある。しかし、格関係であっても「注意書き」のように濁ったり、連用修飾関係でも「高利貸し」のように濁らない場合がある。これは、次節に述べる意味に関係している。

(V-16) (名詞+動詞連用形で)「…する人」の意味の時は連濁を生じない。

「包丁使い」が「づかい」と濁るのに、「人形使い」が濁らないのは、前者が「使い方」を意味しているのに対して、後者は「使う人」を意味しているからである。「…する人」の意味の時濁らないという性質は、次に示すようにかなり一般的である。

月給取り、将棋指し、人買い、相撲取り、「ピアノ弾き」、「絵描き」

格関係の場合を更に整理してみると、「…する人」の意味以外に示す規則が成り立つことがわかる。

(1) 生き物の名前となるものは、連濁を生じない。

ヤドカリ、アリクイ、カマキリ

(2) 「…する道具」を意味するときは、連濁を生じない。

水差し、ズボン吊り、本立て、爪切り、ねずみ取り

(3) 「…を…すること」の意味で、作業、仕事、遊び等を示すときは、連濁を生じない。

原稿書き、草取り、麦踏み、かるた取り、落ち穂拾い、旗取り

(4) その動作の結果生ずる具体物・対象を示すときは連濁を生ずる。

人相書き、効能書き、ガラス張り、塩引、梅干し

(5) 「…を…すること」の意識が薄く、一語としての意識が強いものは連濁を起す。

値踏み、足踏み、毛羽立ち、目張り

佐藤大和（1989）はさらにアクセントと連濁の関係について触れているが省略する。

以上奥村三雄（1955）（1980）（1984）・中川芳雄（1966）・金田一春彦（1976）・佐藤大和（1989）により、連用名詞の連濁に関して明らかにされたことは以下の（1）から（3）で

ある。(1)にはア～ケまでの9項目の例外を規定する細則が立つことになる。

(1) 目的格・主格のときは非連濁が多い。

ア、ただし、ナ行・マ行・エの後では連濁することが多い。[金田一 (1976)]

イ、2拍語に比べて3拍語では連濁することが多い。[金田一 (1976) ・奥村 (1984)]

ウ、目的格とは見なせないヲ格の語は連濁する。[金田一 (1976) ・奥村 (1984)]

エ、「ヲ～スル人」のときは連濁しない。[中川 (1966) ・金田一 (1976) ・佐藤 (1989)]

オ、生き物の名前となるものは、連濁を生じない。[佐藤 (1989)]

カ、「…する道具」を意味するときは、連濁を生じない。[佐藤 (1989)]

キ、「…を…すること」の意味で、作業、仕事、遊び等を示すときは、連濁を生じない。

[佐藤 (1989)]

ク、その動作の結果生ずる具体物・対象を示すときは連濁を生ずる。[佐藤 (1989)]

ケ、「…を…すること」の意識が薄く、一語としての意識が強いものは連濁を起こす。[佐藤 (1989)]

(2) 連用修飾格のときは連濁が多い。

(3) 連濁の語は平板式 (無核型) アクセント、非連濁の語は起伏式 (有核型) アクセントであることが多い (特に2拍語)。

3. 連用名詞とその用法

3.1 連用名詞と用法一覧

以下に本稿の考察の前提となるヲ格をとる連用名詞の一覧表を作成し、ヲ格は非連濁傾向が強く、連用修飾の用法は連濁傾向が強いこと、つまり「ヲ格非連濁規則」が成り立つことを確認する。先行研究の中では金田一春彦 (1976) に載せられた主格と目的格の連用名詞を後部成素にもつ複合語の一覧表がもっとも詳しく、二拍連用名詞 25 語とそれらを後部成素とする数多くの語をあげている (三拍語は本文中に 28 語を少数の語例であげる)。〈表 1〉は金田一氏のあげた語例を補訂するものであるが、表中の連用名詞はある特定の資料から網羅的に抜き出したものではなく、複合語の後部成素となるものを集めたに過ぎない。また、清濁の対立のない子音を語頭に持つ語は連濁・非連濁に関わらないし、すでに語中に濁音を含む語はライマンの法則に抵触するために連濁しないので表に含まれない。以上の条件を越えて考察対象になるのは語中に濁音を含まない動詞のうち、目的語をとるものである。それらの動詞の中で、連用形名詞が実際に複合語の後部成素となるものが本稿の考察対象となる。先行研究で連用修飾的用法と一括りにされてきたものを 5 種類に分類して示した。また[4.2]で詳しく考察するヲ格の「結果の持続」用法に※を付した。この用法はヲ格でありながら連濁形をとるもので、連濁の条件をさぐるための重要な存在である。

〈表1〉動詞連用形転成名詞の用法一覧

格 語	①ヲ格	②デ格	③ニ格	④様式	⑤副詞	⑥接尾	備考
1拍							
着	×	●	×	×	●	×	
2拍							
買い	○	●	×	●	●	×	
飼い	○	●	●	●	●	×	
替え	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…水カエ／席ガエ
書き	◎※	●	●	●	●	×	ヲ格…宛名カキ／人相ガキ
掻き	○	●	×	◎	●	×	様式…犬カキ
掛け	◎※	●	●	●	●	●	肘カケ／雑巾ガケ
刈り	○	●	×	●	●	×	
狩り	●	●	×	●	●	×	
切り	○	●	×	●	●	●	
食い	◎	●	×	●	●	×	ヲ格…冷や飯クイ／グイ
組み	●	●	×	●	●	×	
汲み	○	●	●	●	●	×	
消し	○	●	×	●	●	×	
蹴り	○	●	×	●	●	×	
越え	●	●	×	●	●	×	
込め	●	●	●	●	●	×	
裂き	◎	●	×	●	●	×	ヲ格…股サキ／ザキ
差（刺）し	◎※	●	●	●	●	×	ヲ格…油サシ／目ザシ
敷き	◎※	●	●	●	●	●	ヲ格…布団シキ／板ジキ
締め	◎※	●	×	●	●	×	ヲ格…床シメ／根ジメ
漉き	○	◎	×	●	●	×	デ格…手スキ／機械ズキ
捨て	○	●	●	●	●	×	
刷り	○	●	●	●	●	×	
攻め	●	●	×	●	●	×	ヲ格の連濁形は鼻音の影響か
剃り	○	●	×	●	●	×	
立（建）て	○	●	●	●	●	×	
溜め	◎※	●	●	●	●	×	ヲ格…水タメ／肥ダメ
付け	◎※	●	●	●	●	●	ヲ格…味ツケ／口ツケ
漬け	◎※	●	●	●	●	×	ヲ格…白菜ツケ／梅ヅケ
積み	◎※	●	●	●	●	×	ヲ格…石ツミ／石ヅミ
詰め	◎※	●	●	●	●	●	ヲ格…石ツメ／石ヅメ
連れ	●	●	●	●	●	●	
解き	○	●	×	●	●	×	
止め	●	●	●	●	●	×	
取り	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…脂トリ／鼻ドリ
張（貼）り	◎※	●	●	●	●	●	ヲ格…タイルハリ／板バリ
引き	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…綱ヒキ／籤ビキ
拭き	○	●	×	●	●	×	
葺き	○	●	●	●	●	×	デ格…瓦ブキ
伏せ	◎※	●	●	●	●	●	ヲ格…／桶ブセ
踏み	◎	●	×	●	●	×	ヲ格…麦踏み／足踏み
振り	○	●	×	●	●	●	
干し	◎※	●	●	●	●	×	ヲ格…布団ホシ／梅ボシ
掘（彫）り	○	●	●	●	●	×	様式…上総ボリ・鎌倉ボリ

3拍							
返し	●	●	●	●	●	×	
隠し	○	●	●	●	●		
重ね	○	●	●	●	●	×	
固め	●	●	×	●	●	×	
搦め	○	●	●	●	●	×	
括り	○	●	●	●	●	×	
食らい	◎	●	×	●	●	×	ヲ格…大飯クライ／グライ
殺し	◎	●	×	●	●	×	
冷まし	◎※	●	×	●	●	×	ヲ格…熱サマシ／湯ザマシ
曝(晒)し	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…恥サラシ／布ザラシ
触り	○	●	●	●	●	×	
仕立て	○	●	●	●	●	×	
掬い	○	●	●	●	●	×	
揃え	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…道具ソロエ／馬ゾロエ
倒し	○	●	●	●	●	×	
助け	●	●	×	●	●	×	
叩き	○	●	×	●	●	×	
畳み	○	●	×	●	●	×	
使(遣)い	◎	●	×	●	●	×	ヲ格…蛇ツカイ／金ツカイ
掴み	○	●	×	●	●	×	
尽くし	●	●	×	●	●	●	ヲ格…心ツクシ
作り	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…物ツクリ／ヅクリ
挟み	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…鬢ハサミ／紙バサミ
払い	◎	●	●	●	●	×	ヲ格…埃ハライ／人バライ
晴らし	●	●	×	●	●	×	
浸し	○	●	●	●	●	×	ヲ格…柿ヒタシ
拾い	○	●	×	●	●	×	
吹かし	○	●	×	●	●	×	ヲ格…エンジンフカシ
降らし	○	●	×	●	●	×	
篩い	◎	●	×	●	●	×	ヲ格…饅飩ブルイ／砂フルイ
4拍							
拵え	●	●	●	●	●	×	

【凡例】

この表はヲ格をもつ動詞連用形から転成した名詞を拍数別・五十音順に配列したものである。これらの名詞が複合語の後部成素となったとき連濁／非連濁のいずれの形をとるかを連濁＝●、非連濁＝○、連濁・非連濁両形＝◎、「×」＝複合語形が存在しないとして簡略に示したものである。

複合語内部の関係を①「ヲ格」、②「テ格」、③「ニ格」、④「様式等」、⑤「副詞等」、⑥「接尾辞」の六種類に分類した(①を目的格、②～⑤を連用修飾格として扱うこともある)。以下に具体例を示す。

- ①ヲ格…(目的格) 手紙ヲ書く→手紙書き
 (結果の持続) 板を敷いてある→板敷き ※印を付した。

- ②テ格…(手段・方法・材料) 鉛筆で書く→鉛筆書き
 (場所) 露天で掘る→露天掘り

- ③ニ格…（場所）裏ニ書く→裏書き
 ④様式等…（比況）…驚のヨウニ掴む→驚掴み
 （様式）寢殿形式ニ／デ造る→寢殿造り 蔵風ニ造る→蔵造り
 （発祥地）その地方発祥の技術デ掘る→鎌倉彫 上総堀り
 ⑤副詞等…早く書く→早書き 朝取る→朝取り
 ⑥接尾辞…ピカソ張りの抽象画

補注：「ヲ格」には「綱引き」「髭剃り」のような一般的な語のほか、「手紙書き」「布団干し」「醤油掛け」等の、国語辞書に立項されない「緩い複合」の語も含める（それらの語の連濁／非連濁の判断は筆者が行った）。「デ格」のうち手段を表す用法の有無を決定するには「手-」「機械-」等を前部成素とした場合それらの語が辞書等に登録されていなくとも不自然でなければ「有」と判断した。場所・方向を表す用法の有無の決定には「山-」「街-」等を、「様式等」には「子供-」「鎌倉-」等を、「副詞等」には「早-」「まとめ-」「急ぎ-」等を用いて判断した。

3.2 ヲ格と連用修飾格の対比

連用名詞のうち目的格（①ヲ格）は非連濁形をとることが多く、連用修飾格（②デ格、③ニ格、④様式等、⑤副詞等、⑥接尾辞）はほとんど例外なく連濁形をとることがく表1>からはっきりと見て取ることができる（「犬掻き」が非連濁形をとる理由は不明。ヲ格の「一掻き」の複合語が多数存在すること、連用修飾格の連濁形「一書き」が多数存在することから、非連濁形が採用されたか。「イヌオヨギ」は14世紀の例があるが「イヌカキ」の成立は新しいようである）。以下に<表1>の検証と考察の材料を豊富にすることを目的として、連用名詞ごとにその複合語の具体例をヲ格と連用修飾的用法に対比して示す。用例は辞書の項目に立つものだけをあげる。連用名詞は拍数別・五十音順、複合語は（ ）内に五十音順で示す。「←→」の左側にヲ格、右側に連用修飾的用法を示す。ヲ格のうち※を付してあるものは結果の持続用法。

2拍

替え（国ガエ・鞍ガエ・衣ガエ・宗旨ガエ←→⑤洗イガエ）

書き（宛名カキ（ガ）キ・絵カキ・※効能ガキ・手紙カキ・名前カキ・似顔絵カキ・※人相ガキ←→②鉛筆ガキ、③裏ガキ・箱ガキ、⑤早ガキ）

掻き（恥カキ・耳カキ←→④犬カキ）

掛（懸）け（※漆ガケ・衣紋カケ・刀カケ・腰カケ・※ソースガケ・水カケ・※練乳ガケ←→③上ガケ、⑥命ガケ・エプロンガケ・心ガケ・三人ガケ）

貸し（金カシ←→②高利カ（ガ）シ）

刈り（稲カリ・草カリ・芝カリ←→④虎ガリ、⑤角ガリ）

- 狩り (兎ガリ・狐ガリ↔②鷹ガリ)
切り・斬り (人キリ・水キリ・↔②居合いギリ・辻ギリ)
食い (蕎麦クイ・人クイ↔④犬グイ、⑤早グイ)
組み (腕グミ↔②石組み・木組み)
蹴り (石ケリ・カンケリ↔②脚ゲリ・膝ゲリ)
刺し (刀サシ・釘サシ・針サシ↔③目ザシ・エラザシ)
差し・指し (人サシ・紅サシ・水サシ・物サシ・指サシ↔②一輪ザシ)
敷き (布団シキ・※石ジキ・※板ジキ↔⑥千畳ジキ)
捨て (ゴミステ・姥ステ↔⑤置きズテ・聞きズテ)
剃り (剃刀・髭ソリ↔⑤深ゾリ)
立て・建て (鏡タテ・傘タテ・義理ダテ・箸タテ・本タテ・家タテ↔④一戸ダテ・貸家ダテ・平屋ダテ)
付け (味ツケ※・絵ツケ↔②釘ヅケ・糊ヅケ)
積み (※石ヅミ↔⑤下ヅミ)
摘み (茶ツミ・花ツミ↔⑤朝ヅミ)
詰め (氷ヅメ↔②義理ヅメ、③箱ヅメ、⑥働キヅメ)
連れ (↔⑥親子ヅレ)
解き (絵トキ・帯トキ・謎トキ・紐トキ・夢トキ↔⑤早ドキ)
止め (足ドメ・帯ドメ・鎗ドメ・咳ドメ・痛みドメ・痒みドメ↔⑤寸ドメ)
取り (キノコトリ・本歌ドリ↔②手ドリ)
張り (※ガラスバリ・タイルハリ・※タイルバリ↔③裏バリ、⑥ピカソバリ)
拭き (窓フキ↔②水ブキ)
振り (棒フリ↔⑤素ブリ、⑥一年ブリ・暮ラシブリ)
干し (※梅ボシ・物ホシ↔⑤陰ボシ)
踏み (足ブ(フ)ミ・初山ブミ・絵ブミ・影フミ・瀬ブミ・麦フミ・餅フミ・雪フミ↔⑤揃いブミ)
掘(彫)り (穴ホリ・井戸ホリ・芋ホリ・筍ホリ↔②一刀ボリ・機械ボリ・木ボリ・手ボリ、③ギヤマンボリ、④上総ボリ・鎌倉ボリ・毛ボリ・筋ボリ)

3拍

- 返し (ネズミガエシ↔⑤倍ガエシ)
食らい (饅飩クライ・大酒グライ・大飯グライ／クライ・酒クライ↔⑤大グライ)
固め (足ガタメ・歯ガタメ↔④海老ガタメ)
括り (首ククリ・袖グクリ・芥子グクリ・鞠ククリ↔⑤総グクリ)
転かし (山コカシ↔⑥親切ゴカシ)
殺し (牛コロシ・鬼コロシ・主ゴロシ・鼠コロシ・人ゴロシ)

- 浚い・掠い（どぶサライ・棚ザラエ・人サライ←→⑤総ザライ）
 晒し（恥サラシ←→③店ザラシ）
 仕掛け（喧嘩ジカケ←→②色ジカケ）
 掬い（金魚スクイ・泥鰌^{どじょう}スクイ←→②手ズクイ）
 叩き（石タタキ・肩タタキ・金タタキ・蠅タタキ・モグラタタキ←→⑤袋ダタキ）
 使い・遣い（犬ツカイ・心遣い・蛇ツカイ・猛獣ツカイ・妖術ツカイ←→⑤無駄ヅカイ）
 掴み（鍋ツカミ・手ツカミ←→②手ヅカミ・④鷺ヅカミ）
 尽くし（心ツクシ←→⑥花ヅクシ）
 作り・造り（鏡ツクリ・酒ツ（ヅ）クリ・玉ツクリ・贋金ツクリ・物ツ（ヅ）クリ←→④
 蔵　ヅクリ・寝殿ヅクリ）

上記の他に、一般に辞書の見出し項目にはならない複合語がある。たとえば「取（採）り」を後部成素とする複合語のうち、「茸トリ」・「天下トリ」・「虫トリ」・「物トリ」などは辞書の見出し項目となる程度に一般化している語である。「椎茸トリ」・「蝶トリ」・「板トリ」などは一般には使用されることがないが、特別な場合には使用されることがあるだろう。さらに可能性は低いが「ウイルストリ」・「湖トリ」・「宇宙トリ」などもより特別な場合やフィクションの世界などでは使用されるかもしれない。いずれも「～を取る」というヲ格の基本的用法である。また「掴み」を後部成素とする複合語のうち「足ツカミ」・「腕ツカミ」・「袖ツカミ」等は一般には使用されないが、「～ヲツカムコト」の意味ならばやはり非連濁形となる。このようにヲ格の連用名詞を後部成素とする語は使用頻度の高い語から臨時的に使用される語まではば広く存在する。ヲ格の「ートリ」「ーツカミ」等の非連濁形の複合語は特別な意味変化を被らない汎用性の高い形であるといえよう。それに対して「～ヲ～テアル」の意味（結果の持続を表すアスペクト形式）をもつ「タイトル張り」や結果の持続がさらに特別な意味に転化した「梅干し」などの語は、ヲ格のうちの特殊用法と位置づけることができる。連用修飾格（テ格・ニ格・様式・副詞・接尾）の用法も汎用性はなく、特定の前部成素と特定の連用名詞との結びつきと見なすことができる。この汎用性の高さは熟合度の低いことを意味し、汎用性の低さは熟合度が高いことを意味すると考えてよいだろう。

3.3 ヲ格非連濁規則の例外

[3.1][3.2]を通して明らかのように、連用修飾格は連濁形をとって例外がほとんどない。「手漉き」はテ格で非連濁形をとる稀な例である。また、「高利貸し」は現代では非連濁形から連濁／非連濁両形に転じている。「高利^テ金ヲ貸スコト」の原義が忘れられ、「～ノ人」に類推して非連濁形が生じたのだろう。それに対してヲ格は非連濁傾向が強いものの、多くの連濁形も見られる。それらはヲ格非連濁規則の例外ということになるが、例外になる条件を以下のとおり鼻音・拍数・結果の持続用法・意味の分化の四種類に分類して示すことができる。

3.3.1 鼻音

金田一春彦（1976）が指摘したナ行・マ行・「エ」の後という音声的条件では目的格でも

連濁形が多いということをく表1〉で確認するとその条件に該当するのは「替え」「組み」「越え」「込め」「攻め」「締め」「溜め」「詰め」「止め」で、例外は「摘み」「踏み」(連濁形も存する)のみでありヲ格非連濁規則の例外を規定する細則として成立するようである。

3.3.2 拍数

拍数の点で3拍は2拍よりも連濁傾向が強い傾向は見られる。しかし2拍語にも連濁する物があり、拍数の違いが連濁／非連濁を決定する条件とはいえないようである。2拍語の場合は連濁形に平板式、非連濁形に起伏式アクセントが対応することが多く(上記例では「金カシ」「人クイ」「姥ステ」「味ツケ」「絵ツケ」「茶ツミ」が非連濁形にもかかわらず東京アクセントで平板式となる)、連濁とアクセントは並行した現象であるということができ、3拍語では連濁形／非連濁形ともに起伏式をとるものが多く、アクセント型との対応があるとはいいたい。

3.3.3 結果の持続用法

結果の持続用法をもつ連用名詞は「書き」「賭け」「差し・刺し」「敷き」「締め」「溜め」「付け」「漬け」「積み」「詰め」「張り・貼り」「伏せ」「干し」「冷まし」で、これらは「～ヲ／ガ～シテアルコト」の意味(「結果の持続」を表すアスペクト形式)である。この意味をもつ場合は「味付け」を除くとすべて連濁形をとる。その理由については[4.2]で考察する。

3.3.4 意味による清濁の分化

「衣紋^か掛け」と「雑巾^が掛け」、「板^じ敷き」と「風呂^{しき}敷」、「布団^ほ干し」と「甲羅^ほ干し」・「虫^ほ干し」、「蛇遣い」と「人使い」のように語構造がヲ格で共通していながら連濁／非連濁を異にする例がある。「衣紋^か掛け」と「雑巾^が掛け」では「掛け」の意味が異なるので、その区別を容易にするために後者が連濁形をとったものと考えられる。「風呂^{しき}敷」は「風呂ニ敷く布」であり本来は連濁形をとるべき語であるが、連濁形「石敷き」「板敷き」等の「～ジキ」が「～ヲ敷キ詰メテアルコト」の意味をもつので、意味の区別を容易にするために非連濁形をとったと考えられる。「甲羅干し」は「甲羅を干すように日光を浴びること」の意である。「虫干し」は「虫を干す」のではなく「虫が付かないように本等を干すこと」の意である。比喩的な意味に基づく形式的ヲ格であり、語の真の意味は別にある。「蛇遣い」と「人使い」の場合は前者が「蛇ヲ使ウコト／人」の意味であるのに対して後者は「人ノ使イ方」の意味である。前者の「～スル人」の意味と後者の「～スルコト」の意味を区別しているわけではない。連濁が意味の分化に関与することの意味については次節で考察する。

4. ヲ格連用名詞の用法

4.1 ヲ格連用名詞の用法の分類

前節ではヲ格非連濁規則の例外について概観し、例外がおおむね四種に分類されることを確認した。本節ではヲ格の用法をさらに詳細に検討することにより、例外が生じる理由を解明し

〈表2〉ヲ格連用名詞の用法

複合語 \ 用法	①	②	③	④	備考
2拍					
名前書き	○	○	○	×	×
宛名書き	○	◎	◎	×	×
効能書き	○	◎	◎	●	×
水掛け	○	○	○	×	×
練乳掛け	○	○	○	●	×
衣紋掛け	○	○	○	×	×
鉤掛け	○	○	○	×	×
雑巾掛け	○	◎	◎	×	×
エプロン懸け	×	×	×	×	×
金貸し	○	○	○	×	○
高利貸し	×	×	×	×	◎
石組み	○	◎	◎	●	×
腕組み	○	◎	◎	●	×
草刈り	○	○	○	×	×
兎狩り	○	●	●	×	×
目刺し	○	×	×	●	×
釘刺し	○	○	○	×	×
鱒刺し	○	○	○	×	×
イカ刺し	×	×	×	×	×
布団敷き	○	○	○	×	×
板敷き	○	○	○	●	×
千畳敷	×	×	×	×	×
味付け	○	○	○	○	×
釘付け	×	×	×	×	×
煉瓦積み	○	○	○	×	×
石積み	○	○	○	●	×
肉詰め	○	◎	◎	●	×
氷詰め	○	◎	◎	●	×
子連れ	○	×	×	●	●
虫取り	○	○	○	×	○
タイル張り	○	○	○	●	○
ガラス張り	○	○	○	●	×
縄張り	○	○	○	●	×
ピカソ張り	×	×	×	×	×
目張り	×	×	×	×	×
綱引き	○	○	○	×	×
ライン引き	○	○	○	×	○
線引き	○	◎	●	×	○
塩引き	○	◎	◎	●	×
雲母引き	○	◎	◎	●	×
代引き	×	×	×	×	×
百円引き	×	×	×	×	×
屋根葺き	○	○	○	×	○
藁葺き	×	×	×	×	×
麦踏み	○	○	○	×	×
足踏み	×	×	×	×	×
物干し	○	○	○	×	×
布団干し	○	○	○	×	×
梅干し	○	×	×	●	×

虫干し	×	×	×	×	×	「虫を干す」意味ではない
甲羅干し	×	×	×	×	×	「甲羅を干す」意味ではない
3拍						
大飯喰らい	○	◎	◎	×	◎	
熱冷まし	○	○	○	●	●	[4]薬
酔い醒まし	○	●	●	×	●	
湯冷まし	○	●	●	●	×	
爛冷まし	○	●	●	●	×	
興醒まし	○	●	●	×	●	
目覚まし	○	●	●	×	●	
眠気覚まし	○	●	●	×	●	
手 ^{さわ} 触り	×	×	×	×	×	「手を触る」意味ではない
足触り	○	○	○	×	×	「足を触ること」
棚 ^い 浚え	○	●	●	×	×	
ゴミ浚い	○	○	○	×	×	
魔法使い	○	○	○	×	○	人の使い方 筆の使い方
へび使い	○	○	○	×	○	
人使い	○	×	×	×	×	
筆遣い	○	×	×	×	×	
鍋掴み	○	○	○	×	○	
袖掴み	○	○	○	×	×	[2][3]は連濁形も可か
心尽くし	○	○	○	×	×	
蟹尽くし	×	×	×	×	●	接尾語
ドミノ倒し	○	○	○	×	×	ゲーム
将棋倒し	×	×	×	×	×	「将棋の駒」を倒すことから
米作り	○	◎	◎	×	◎	※[4]は非連濁形が自然か
物作り	○	◎	◎	×	◎	
偽金作り	○	◎	◎	×	◎	
露払い	○	○	○	×	○	
人払い	○	●	●	×	×	
屑拾い	○	○	○	×	○	
命拾い	×	×	×	×	×	「拾う」意味ではない

たい。〈表2〉は主として「結果の持続」用法と他の用法を比較するためにヲ格連用名詞の用法をさらに細かく分類して検討した結果を示したものである。まず見出し語を拍数別・後部成素の五十音順に配列し、それぞれについて動詞連用形本来の用法としての①、連用名詞に転じた①、サ変動詞としての用法の②、結果の持続を表す③、「～スル人」の意味を表す④の用法の有無を確認した。その用法がある場合、非連濁形を○、連濁形を●、連濁／非連濁両形を◎の記号で示し、用法がない場合は×の記号で示した。①は①と比較して「藁葺き（テ格）」「虫干し」「甲羅干し」「将棋倒し」「命拾い」等の語や接尾語としての用法の語が通常の「ヲ格」とは異なる意味であることを明示するために表の項目に含めた。①・②は「動作性」、③は「状態性」の有無を確認することができる。以下に各用法ごとに具体例を挙げる。

①動詞連用形としての用法 (例) タイルヲハリニ行ク

①連用名詞としての用法 (例) タイルハリニ行ク

②サ変動詞の用法 (例) タイルヲハリスル

③結果の持続の用法 (「～ヲ～テアル」の意味) (例) タイルバリニナル

④「～スル人／物」の意味（例）タイルハリ（職人）

〈表2〉にあげた語例のうち、結果の持続用法をもたないのに連濁形をとるものは「宛名書き」「兎狩り」「線引き」「酔い醒まし」「興醒まし」「目覚まし」「眠気覚まし」「米作り」「物作り」「人払い」である。このうち「引き」「冷まし」には結果の持続用法をもつ連濁形の複合語が存在する。

4.2 結果の持続用法

以下に通常のヲ格の用法と結果の持続の用法とを具体例で対比してを示す。「←→」の左側は通常のヲ格で非連濁形、右側はヲ格のうちの「結果の持続」を表す場合で連濁形（ただし「味ツケ」は例外）。

- 書き 宛名カ（ガ）キ・名前カキ←→効能書き・人相ガキ
- 掛け 衣紋カケ・刀カケ・腰カケ・水カケ←→漆ガケ・ソースガケ・練乳ガケ
- 組み 石クミ・腕クミ←→石グミ・腕グミ
- 刺し 釘サシ←→目ザシ
- 敷き 布団シキ←→石ジキ・板ジキ
- 付け 味ツケ・絵ツケ←→味ツケ（海苔）
- 積み 石ツミ←→石ヅミ
- 詰め 石ツメ←→肉ヅメ
- 引き 綱引き・線ヒ（ビ）キ・ラインヒキ←→塩ビキ・雲母ビキ
- 貼り タイルハリ←→タイルバリ・ガラスバリ
- 干し 物ホシ←→梅ボシ
- 冷（覚・醒）まし 熱サマシ・目ザマシ・酔いザマシ←→湯ザマシ・爛ザマシ

連濁形をとる理由については[4.2]で考察する。2拍語では「狩り」を除くと結果の持続用法の場合のみ連濁形となっている。その際、「～ヲ～スルコト」の意味の場合のアクセントは起伏式を、結果の持続の用法の場合は平板式をとることが多く（たとえば「カネカシ（金貸し）」等のように例外もある）、連濁／非連濁の区別は平板式／起伏式の区別に並行していることがおおい。3拍語では結果の持続の用法を持つ語が少なく、「湯冷まし」「爛冷まし」等があるだけである。「冷まし」は第2拍が鼻音「マ」であり連濁し易い環境にある。さらに3拍語では連濁形でも起伏式アクセントをとるものが多く、2拍語に見られた平板式と起伏式アクセントの使い分けも見られない。3拍語ではヲ格でも連濁形が多くなっている理由にアクセントの使い分けによる支えがないことも考えられる。その中であって「熱冷まし」は例外的に非連濁形かつ起伏式アクセントという2拍語と同様の形態であり、結果の持続の意味を持つ「湯冷まし」等の連濁形（ただしこの場合起伏式アクセント）の持つ語から区別されている。「連れ」は瞬間的な動作ではなく継続した動作を表すので連濁形をとると考えられる。「筆遣い」等の「～ヅカイ」は「～の使い方」の意味を持つ一方で、「～を使うこと」の意味を失っている。これは「使い」の本来の意味が瞬間的な動作ではなく持続的な動作であることに起因するものだろ

う。連濁には関わらない語だが「子持ち」「通過待ち」などの「持ち」「待ち」なども持続的な動作を表す動詞である。金田一春彦(1976)に例外としてあげられた「籤引き」「字引」「友引」「福引き」等も語構成意識・語源意識が薄くなった結果として動作性の意味を消失していることが連濁する理由だろう。

4.3 意味の分化

人を意味するヲ格連用名詞はそれ以外のものに比べて非連濁傾向が強いのだろうか。2拍名詞には「～スルコト」を意味する語と「～スルヒト」を意味する語との間に差はない(どちらも非連濁)だが、3拍名詞の場合は「蛇ツカイ」等ヒトを表す場合は非連濁で「筆ヅカイ」等は連濁形をとり両者の区別は顕著である。しかし、後者は動作性の「～スルコト」の意味ではなく状態性の「～する方法」の意味であり、その点で一般の連用名詞と異なっている。「殺し」の場合「鬼殺し(酒)」「牛殺し(植物)」「鼠殺し(毒薬)」「坊主殺し(私娼)」等が非連濁形なのに対して「人殺し」「主殺し」が連濁形なのは、前者がそれを業としている人/物を指すのに対して後者は「人ヲ殺シタ人」「主ヲ殺シタ人」の意味であり、人を殺すことを業とはしていないからである。つまり「人殺し」の場合は動作性はなく、「殺した経験」という属性を表しているのである。連濁形「手触り」「肌触り」は「～ヲサワルコト」の意味はなく「サワッタトキノ感触」の意味となる。「触ルコト」「掴ムコト」の意味ならば「手サワリ」「肌サワリ」「手ツカミ」「袖ツカミ」等非連濁形をとる。「作(造)り」の場合も「酒造り」「贋金造り」「物作り」等で連濁/非連濁両形が見られるが、連濁形が状態性の意味をもつわけではない。連濁形が「ツクルコト」、非連濁形が「ツクルヒト」のような対立はないと考えられる(今後そのような使い分けが生じる可能性はある)。「山コカシ」「ステコマシ」「人掠い」「恥晒し」「石叩き」「金叩き」「女誑し」等は非連濁形をとる。

連濁形「雑巾掛け」(「鉤掛け」「アイロン掛け」も連濁可能か)は「衣紋掛け」「仕掛け」等の非連濁形と意味の違いを際立たせるために生じた形であろうか。「線を引くこと」の意味の「線引き」は連濁形、道具としての「線引」は非連濁形であるが、後者は一般的に「定規」「物差し」と呼ばれており、「線ヲ引クコト/線ヲ引イテ二分スル」の意味の「センビキ」とは成立事情が異なるようである。

「石敷」・「板敷」・「畳敷」等一群の連濁形「ージキ」は継続(～を敷き詰めてあること)あるいは手段(～で敷くこと)の意味をもち、連濁形の中で多数形である(「千畳敷」等の接尾語としての用法もこれに準じる)。この意味での連濁形「フロジキ」は現実には存在しがないが、通常連濁形をとるべき「風呂に敷く布」の意味の「フロシキ」は、上記多数形から区別されるべく非連濁形として成立したものと考えられる。しかし複合は強い(意味のまとまりが強い)ので大風呂敷は右枝分かれ構造でも連濁形を取ることができた。「～仕立て」なども同様に右枝分かれ構造の連濁形。

なお連濁形「甲羅干し」「虫干し」「本歌取り」「命拾い」は[3.3.4]で見たように比喩的な表現に基づいており、連用修飾的用法に準ずるものである。

4.4 動作性と状態性

ヲ格非連濁の法則は動詞連用形の用法「タイルを張りに行く」とヲ格連用名詞の用法「タイル張りに行く」とが、その形式においても意味においても十分に近いことから生じたと考えられる。結果の持続用法、接尾語「ーバリ」は動詞出自であることの属性である動作性を失い、状態性をその意味の中心としている点で、通常のヲ格連用形とは異なるのである。動作性を失う過程をもう少し詳しく見ると以下ようになる。

- (1) 「～ヲ～スルコト／人／物」…「布団敷き」・「布団干し」・「タイル張り」等
- (2) 「～ヲ～シテアルコト」…「人相書き」・「石組み」・「板敷き」・「タイル張り」等
- (3) 「～ヲ～シテアルコト」からの転義…「梅干し（食品）」・「梅漬け（食品）」・「目刺し（食品）」等
- (4) 接尾辞…「浴衣掛け」・「千畳敷（広さ）」・「セザンヌ張りの風景画（似ていること・真似ること）」等

(2)～(4)は(1)のもっている動作性の意味を状態性に変化させている。そのような意味の変化を被っているとき、連濁形をとるのである。よって、これまでの研究で指摘された人（生物名・道具）を表す場合が特に非連濁形をとる傾向が強いということは、そこに上記(2)(3)(4)の場合を含まないからなのである。このように連用名詞の連濁／非連濁を決定する条件は動作性の有無にあるのである。この後部成素の意味の変化という点を連濁現象全般に当てはめてみると、複合において後部成素の意味が限定されたり、意味の変化を被ったりする場合に連濁が起こるとい一般化を行うことができよう（ただし音声的非連濁条件が存在する場合はこの限りではない）。

5. おわりに

5.1 まとめ

ヲ格非連濁規則の例外について本稿で得られたことは以下のとおりである。

- (1) ヲ格非連濁規則の例外と見なされてきた「人相書き」・「石積み」・「板敷き」・「タイル張り」・「梅干し」・「縄張り」等はその意味が「～ヲ～シテアルコト」であり結果の持続のアスペクトを表したり、あるいは結果の持続の意味がさらに特定の事物に転じている場合であり、通常のヲ格連用名詞が「～スルコト／モノ／ヒト」の意味をもち非連濁形をとることと対照的である。
- (2) 「甲羅干し」「命拾い」等は「甲羅を干すこと」「命を拾うこと」ではなく、比喩的な意味であり連用修飾格に近い用法である。
- (3) 「兎狩り」「雑巾掛け」など意味の分化を清濁に対応させることによって連濁したものがある。

ヲ格連用名詞としての通常の用法「石積^こみに行く」は動詞連用形の用法「石を積みに行く」との間に「積む」という動作性を中心とした意味の近似性があるが、上記(1)(2)の用法との間にはそれがない。通常のヲ格連用名詞は動詞連用形としての用法に対して類推の力が働くために非連濁形をとり、(1)(2)の用法(動作性から状態性に転じた意味をもつ)では類推の力が働かないために連濁形をとると考えられる。連用名詞ヲ格の非連濁は動作性によっており、その規則性を破るのは「状態性」という新たな意味の獲得である。(3)のように状態性の意味を持たなくともヲ格に連濁形が生じることには、すでに音声的環境(鼻音と「エ」の後)によってヲ格に連用形に連濁形が生じていたこと、(1)(2)のような状態性の意味を持つ連濁形が生じていたことが影響しているだろう。3拍語において連濁形が多いのは、2拍語と比べて結果の持続用法が少ないこと、2拍語に見られるようなアクセント型との並行性(2拍語の場合は起伏式アクセントが非連濁形を支えていると考えられる)が認められないことによるのだろう。連用修飾格的用法が連濁形をとるということも、上記ヲ格の場合に見られるような非連濁形をとる理由がないということにほかならないだろう。

5.2 濁音史策定の必要性

小論で得られた結論は、かつて複合表示の機能のみを担っていた連濁が、意味の分化にも関与するようになったであろうという連濁の性質の変化(すなわち「濁音史」の見通し)と関係している。非連濁規則に例外が多く、それが不統一や混乱に見えるのは日本語の清濁の性質が交替に近い変化を起こしたためである。その変化はおそらく漢語を日本列島にもたらした人々が獲得した新しい日本語(「ピジン倭人語」ともいいうる)から始まっただろう。その日本語は土着の日本人にも使用されるようになり、畿内を中心として広く日本列島全域に伝播していった。金田一春彦(1976)が想定する「連濁が盛んだった時代」は「清濁が意味の分化に関わることがなかった時代」と規定することができよう。濁音がプロソディに属し濁音前鼻音が弁別的であった時代の日本語には音声的環境による非連濁規則に例外はなく、非連濁の条件がない場合には連濁の圧力が強かっただろう。濁音が分節音に転じその弁別の特徴が有声性に変化すると、上代語には存した「前部成素末の濁音による非連濁規則」はなくなり、撥音の後の濁音化傾向は減少した(類推による影響は残った)。例外らしい例外をもたないライマンの法則も、現在では「縄梯子」や「八丈宝貝」のように原因があるとはいえ例外を生じるようになった(例外の成立過程については鈴木豊(2005)(2008)を参照していただきたい)。仮名が清濁を区別しない形で成立したことや、語頭濁音語とその母体語の意味の近さ(たとえば「振れる」と「振れる」、^{たま}「玉」と^{たま}「玉」)、清濁のみを異にするオノマトベ(たとえば「サラサラ」と「ザラザラ」)における意味の近さは、日本語の清濁の「変質」が遠い過去のことではなかったことを物語っている。日本語の清濁の対立がどのようにして生まれたのかはもとより仮説であるが、連濁/非連濁の条件を見つけ出すためには文献によって日本語が記録される以前の日本語の歴史、特に「濁音史」を策定することが必要である。肥爪周二(2003)は日本

語の濁音を A 連濁による濁音、B 連声濁による濁音、C 連濁・連声濁によらない濁音に分類し、日本語に濁音が生じた順序を A・B・C の順とする枠組みで「濁音史」に一貫した解釈を与えようとしており、濁音史策定の試みはすでに始められているといえる。何をもって濁音史の画期となすべきか、なぜ非連濁規則に消長があるのか等の問題については別稿を期したい。連濁が「類推」（だけ）によって決定され、清濁が意味の分化に関与しうる現代日本語の連濁／非連濁は多分に混成的であり、混沌の度合いを深めつつあるのである。

参考文献

- Benjamin Smith Lyman (1894) “The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds” *Oriental studies; a selection of the papers read before the Oriental club in Philadelphia 1888-1894* pp.160-176 Oriental Club of Philadelphia.
- 奥村三雄 (1955) 「連濁」の項目『国語学辞典』pp.961-962 東京堂出版
- 奥村三雄 (1980) 「連濁」の項目『国語学大辞典』pp.925-926 東京堂出版
- 奥村三雄 (1984) 「連濁」『日本語学』3-5 pp.89-98 明治書院
- 金田一春彦 (1976) 「連濁の解」*Sophia Linguistica* II pp.1-22 上智大学大学院言語学研究室 ※金田一春彦 (2001) (2005) に再録
- 金田一春彦 (2001) 『日本語音韻音調史の研究』pp.334-368 吉川弘文館 ※金田一春彦 (1976) を再録
- 金田一春彦 (2005) 『金田一春彦著作集 第6巻』pp.583-614 玉川大学出版部 ※金田一春彦 (1976) を再録
- 小泉保・船城道雄・本田臆治・新田義雄・塚本秀樹編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子編『日本語の音声・音韻(上)』講座日本語と日本語教育 第2巻 pp.233-265 明治書院
- 鈴木 豊 (2005) 「ライマンの法則の例外について—連濁形「-バシゴ(梯子)」を後部成素とする複合語を中心に—」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』4 pp.249-265 文京学院大学総合研究所
- 鈴木 豊 (2007) 「ライマンの日本語研究」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』6 pp.225-239 文京学院大学総合研究所
- 鈴木 豊 (2008) 「ライマン法則例外の成立過程について—「タカラガイ」(宝貝)を後部成素とする語の連濁—」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』7 pp.279-294 文京学院大学総合研究所
- 中川芳雄 (1966) 「連濁連清(仮称)の系譜」『国語国文』35-6 pp.302-314 京都大学文学部 国語学国文学研究室
- 肥爪周二 (2003) 「清濁分化と促音・撥音」『国語学』54-2 縦書 pp.1-14 国語学会
- 屋名池誠 (1991) 「<ライマン氏の連濁論> 原論文とその著者について 付連濁論原論文「日本語の連濁」全訳」『百舌鳥国文』11 横組 pp.1-63 大阪女子大学大学院国語国文学専攻院生の会

付 記

坂本清恵氏には本稿の草稿に目を通していただき多々有益な御助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお本稿は平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号18520363 研究課

題名「日本語の連濁現象に関する総合的研究」による研究の一部である。